

行政視察

6月25日から27日に、和歌山県と岐阜県へ木質バイオマス先進地の視察へ行きました。
大変充実した視察となりましたので報告します。

調査地等

- ①木質バイオマス・木質パウダーの事例調査（和歌山県日高川町県森林組合・きのくに中津荘）
- ②薪ボイラー・木の駅プロジェクト（岐阜県恵那市山岡町花白温泉）

①日高川町の 木質パウダー

まずは、和歌山県日高川町の森林組合御坊事務所で、木質バイオマスを流域で燃料化する画期的な取り組みを視察しました。林地残材から製造される木質パウダーは、木材を微細な粉に加工し、ガス状に噴射燃焼させるもので、点火・消火が容易で、農業用のビニールハウスにも利用されています。発熱量は化石燃料の約2分の1です。林地残材の有効活用、森林所有者



木質パウダーの取組みを学びました

の収入確保と雇用の安定、さらにはCO₂の排出削減にも大きな貢献しています。

その後、宿泊施設の「きのくに中津荘」へ移動し、行政側から導入の経緯や、どのような運用がされているかなど、長時間に渡り意見交換をしました。また、実際に稼働している木質パウダーボイラーの施設を見学し、運用状況などを温泉施設の支配人から伺いました。

占冠村も日高川町の取組みを参考にしながら、森林資源の活用をさらに調査研究していくべきと感じました。



「きのくに中津荘」の木質パウダーボイラー

②岐阜県恵那市の 薪ボイラー・ 木の駅プロジェクト

翌日は、和歌山県から岐阜県まで長距離をバスで移動し、岐阜県恵那市にある「やまおか木の駅」でNPO法人地域再生機構の丹羽健司氏からお話を伺いました。

花白温泉隣接地の「木の駅」には、多くの原木が集まり、天日乾燥して花白温泉の薪ボイラーの燃料となっています。取組みを始める前には「薪は時代遅れではないか」という声もあつたそうですが、地域で自分たちのエネルギーを考えるには、薪が最適だということでした。薪の原木は一トン6千円。



花白温泉の薪ボイラー

代金は「モリ券」と呼ばれる地域通貨で支払われます。

この「木の駅プロジェクト」は、プロと一般市民が力を合わせて森林に目を向け、林地残材の有効活用と、山仕事の復興を目指すもので、さらに、その対価を地域で使えるモリ券で支払うことにより、地域の商店の活性化を図っています。「俺たちのことは俺たちで決める」「軽トラックとチェーンソーで晩酌を」を合言葉に、気の合う同志が集い、自分たちの手で山や環境を守り、20年後も「薪をくべ続ける」町づくりを目指しているということでした。

状況は異なりますが、占冠村でも「自立するシステム作り」が今後の課題と思われれます。



薪を住民が運んできます